

七月のノートから

加藤文子

七月に入ったとはいえ梅雨が続き、ムシ暑さの中に冷えが潜んでいるようにも感じられる。

夫の展覧会の用事で軽井沢まで出かけることになった。ひんやりした早朝の出発、訪ねる先も避暑地ということもあり、寒がりの私は長袖のTシャツにサマーセーターを合わせることにした。

このカスタードクリーム色のセーターは、生前母が展覧会場で着られるようにと、編んでくれたもの。クーラーの苦手な私は重宝している。ことさら意識しているわけではないのだが、着るのはたいいてい展覧会の時だ。自然にそういうことになっている。

夫の運転する中、助手席でじっとセーターの編み目をみている。不自由な目で編み目を数えながら仕上げてくれたのだ。

縄編みを主体に、細編み、他の手法も施されていてバスケットのようなパーツが印象的だ。手込んだ仕上げに改めて感心している。何度も着てきたのに、今頃になって特別な思いがわいてくる



のだった。

父が亡くなってから、母はよく編み物をするようになった。自分用であったり、私のためであったり、他の誰かに向けてのことも……。淋しい気持ちばかりではなかっただろうけれど、どんな思いで編み棒を動かしていたのだろう。うれしいことを思い出したり、来客を控えた楽しみもあったはず。その時の気持ちも一緒に編み込まれている。

セーターやカーディガンのほか、帽子やマフラーも編んでいた。余った毛糸を寄せ集めて仕上げたレッグウォーマーは、成り行き任せとは思えないほどカラフルで斬新な出来映えだ。特にムラサキや赤の入れ方が冴えている。しかもきつ過ぎず、緩過ぎずフワツとしたフィット感がちょうど良い。楽しんでいないとこんな弾んだ感じは生まれないと思う。

最後に編んでいたのはチャコールグレーのマフラーだった。亡くなった時、長イスの籠に編みかけのマフラーと毛糸玉が置いてあった。体力が落ちて、一日に編めるのはほんのわずかであっても、やめようとはしなかった。なかなか片づける気にはならず、しばらくそのままにしていた。

母から贈られた暖かくて着心地の良いニットのいろいろ。身につけることそのものが、母の思い出だ。

軽井沢では日ざしが眩いのに日陰にいと風が冷たく感じられた。暑くなると腰に巻きつけて、寒くなると着て過ごした。夏にはこのサマーセーターが欠かせない。



オサシダ 7月のテーブル